

第2回 大橋川改修技術検討懇談会 議事要旨

【日時】平成20年7月18日(金) 9:30~11:30

【出席委員】

松江工業高等専門学校 環境・建設工学科 准教授	浅田 純作
松江工業高等専門学校 環境・建設工学科 准教授	大屋 誠
広島大学大学院 工学研究科 社会環境システム専攻 教授	河原 能久
中央大学研究開発機構 教授	福岡 捷二
国土交通省 中国地方整備局 出雲河川事務所長	林 正道

【議事内容】

(宍道湖計画高水位 H.P.+2.5m について)

- ・ 現実に起こった災害をベースに物事を考えるのが治水の基本姿勢であり、斐伊川では昭和47年7月洪水の宍道湖水位が H.P.+2.5m を記録した。斐伊川の河川整備は、H.P.+2.5m を基準として、上流部のダム、放水路を始め、築堤や湖岸堤の整備が着実に進められている。(福岡座長)
- ・ 市民の方には、大橋川の全ての計画高水位が H.P.+2.5m の様な伝わり方をしているように感じている。どこのポイントの水位なのか明確にするべきである。(浅田委員)

(内水について)

- ・ 原因をしっかりと分かった上で、物事を判断していく必要があり、市民の方に内水被害が起こっている原因をしっかりと説明する必要がある。大橋川における外水対策が未実施のため、内水対策の整備も遅れている。(福岡座長)

(整備の考え方について)

- ・ 狭窄部は、現状では氾濫の原因となる。また、将来計画(1/150)に手戻りが生じないようにまちづくりと整合した整備をしなければならないことから、1番目に平面形状を確定するための拡幅が必要である。(福岡座長)
- ・ 治水上のネックは上下流の狭窄部であり、狭窄部の拡幅を優先せざるを得ない。(河原委員)
- ・ 矢田の狭窄による影響で上流からの流量が流れにくくなっている。したがって、狭窄部の拡幅により水位を下げる必要がある。(福岡座長)

(橋梁の整備について)

- ・ 深掘れのため、松江大橋の橋梁基礎は不安定な状態にあると考えられる。特に地震時には全く抵抗出来ないことが予想される。このような橋梁に車両を通すことは危険と考える。残す場合は、機能として何を求めるか整理する必要がある。(大屋委員)
- ・ 橋も構造的にもたない時期がくる。河川改修後の橋梁架替は難しいため、河川改修と橋梁整備は同時に行うことが望ましい。(浅田委員)
- ・ 残す場合も、補強・補修に伴う工事期間が発生することから、工期や工法について架替との比較などの議論が必要である。(大屋委員)
- ・ 治水は重要である。橋の構造が決まらないからといって、法線が決まらないという議論にしないで欲しい。(河原委員)
- ・ 河川からすると、改修箇所に構造令違反の橋梁があれば、架け替えることが原則であるが、橋の重要性により残し方はある。残した場合、どのような形になるのか、次回の懇談会において提示して頂きたい。(福岡座長)
- ・ 検討の方向性は今の流れで問題ないと考える。橋梁については、100年、200年の長いスパンでの計画を考える必要がある。橋梁は劣化するので、メンテナンスや架替のタイミングを検討したうえで、ここの問題を整理すべき。次のビジョンを持って大橋川改修の中で橋を考える。(大屋委員)

(堤防の整備について)

- ・築堤の高さについては、計画規模や戦後最大などの議論がある。(福岡座長)
- ・斐伊川、宍道湖、中海は概ね整備ができつつあるが、大橋川は整備がされていない。流域全体のバランス、さらに松江という重要な県都が未整備の状況について、真剣に考える必要がある。(福岡座長)
- ・計画高水位の高さまでは土堤とする事は最低限のことだと考えている。(福岡座長)

(資料の整理について)

- ・新しい資料が出る際に、追加だけでは誤解をまねくことがあるので、既往のものも含めて全体の流れが分かるような資料整理を御願いたい。(浅田委員)